

## 「魔女の宅急便」以前

―かどのえいこの作家デビューをめぐる「歴史総合」的な授業実践―

安 村 直 己

### 一、はじめに

高校の教育課程において世界史が必修科目と定められているにもかかわらず、多くの高校生が世界史未履修のまま卒業している事実が公になった二〇〇六年秋以降、歴史教育をめぐる大きな議論が引き起こされた。それを受け、文部科学省内では歴史総合という科目を新設する動きが本格化する。そうしたなか、日本学術会議は二〇一六年五月一六日付で「『歴史総合』に期待されるもの」を公表し、従来の高校までの歴史教育が知識詰め込み型で、かつ日本史中心だった点を指摘し、歴史総合においては世界史と日本史の連関を主体的・総合的に学ばせるべきだと提言したのである<sup>①</sup>。

歴史学は暗記科目ではなく、史学科は世界遺産検定の受験指導の場ではないとか、諸地域の歴史は接続してきたとか、大学生に言い聞かせてきた身としては、この提言はもったもなものと考える。ただ、私の専門である植民地期メキシコ、少し広げて南北アメリカ史の講義の場で、学生が主体的に関われるように工夫するのは難しい。こちらの工夫が足

りないのに、身近に感じられない地域の過去を主体的に学べといわれても、学生は何をすべきか途方にくれるだろう。

暗中模索を続けるなか、二〇一八年度と一九年度、西洋史概説と史学の概論を担当するにあたり配慮したのは、西洋、なかでもラテンアメリカの歴史に主体的に学生が取り組むきっかけをどう作るかという点であった。日本近世史の若尾政希は、学生たちの主体性を引き出すにあたり、私たちがいかに歴史的规定を受けているのかを説くという。私たちが歴史に規定されているからこそ、歴史は暗記物であることをやめ、自分の成り立ちを知ることによって現状を変革するための手段となるというわけだ<sup>②</sup>。では、彼女、彼らに歴史的社会的被拘束性を理解させ、かつその身近な歴史にラテンアメリカを組み込んでもらうにはどうすべきなのか。

そこで思いついたのは、私自身のラテンアメリカとの出会いと、それが一九六〇年代、七〇年代の日本社会とラテンアメリカの関りという歴史的条件によっていかに規定されていたのかを、実例として示すという方法であった。しかも、実例を知識として学んでもらうだけでなく、問

いかけを繰り返すことで自分にとって身近な歴史を外部へとひらく／つなくと同時に、日本史、世界史の話として別々に暗記した出来事を身近な歴史へとつなぎかえす術を伝える。こうすることで、安村の個人史が社会によって規定されていた様相を具体的に知ることができ、では自分はそのような歴史に規定されてきたのか、自分がラテンアメリカを身近に思えないのはなぜか、でも実はラテンアメリカも意外と身近なのではないかと考えるきっかけとなることを期待したのである。

以下では、この期待の下におこなった授業実践を記録するとともに、学生の反応を分析していく。なお、青山学院大学史学科の西洋史概説、史学概論では、この授業内容を一貫して提示することはできないので、細切れで複数の授業に挿入せざるをえない。そこで、二〇一九年六月二二日に実施した本学高大連携講座の授業内容を紹介することとした。<sup>3)</sup>

## 二、授業「魔女の宅急便」以前―かどのえいこの作家デビューをめぐる歴史学的考察から―の内容

### ①導入

歴史は大学受験のために学ぶけれど、世の中に出たらとくに役に立たないのではないか。高校生の大半はこう考えているだろう。それに対し、私はここで、歴史は楽しいし、主体的に取り組めばさらに面白いものになるし、学問的な方法を身に付ければ社会に出て役に立つことを示したい。そのためにはまず、歴史を暗記物ではなく、自分のいまを理解するために不可欠な身近な方法だと考えてほしい。その実例としては

私自身がどうやってラテンアメリカと出会ったのかを取り上げる。

説明を理解するためのポイントを指摘しておこう。この講義では、歴史という単語には二つの意味があるという立場をとる。過去に起きた出来事の総体を歴史Aと呼ぶが、この歴史Aが私たちひとりひとりの存在と意識を形作る。それに対し、過去に起きた特定の出来事に関する語りを歴史Bと呼ぼう。歴史Bの特徴は、その出来事について語ることで私たちに未来への展望を示す点にある。私の過去を語る歴史Bを通じて、一見すると縁遠い、教科書上の出来事である歴史Aが、私を形作ってきたことが見えてくるだろう。その方法は、あなたたちひとりひとりが自らの歩みを理解することで、新しい道を切り開くことにも寄与してくれるかもしれない。

歴史学が役に立つ実例としては、日本社会がいま直面している移民の流入をあげ、私たちは日本に暮らす／暮らすことになる彼ら、彼女たちをどう受け入れるべきなのか、という問題を取り上げる。この問題への答えを探るには、国際社会における移民受け入れの現状を参照するだけでは足りず、過去の日本も含めた移民の送出国と受け入れの歴史をも考慮すべきであることを指摘する。

### ②対象の概要

みんなにとって身近な「いま」の地点から過去を遡っていくうえで対象選びは大切だが、ここでは日本の若者の大半が接したことのある映画「魔女の宅急便」を一つの軸とし、その原作である『魔女の宅急便』を二本目の軸とする。基本データを示しておく、映画の監督は宮崎駿

で、プロジェクトが始動したのは一九八五年、製作開始は一九八八年、劇場公開は一九八九年である。三〇年前の映画を現代の高校生の大半が知っているというほどのロングセラー作品なわけである。

それに対し、原作の著者であるかどのえいこは一九七〇年、ポプラ社から『ルイジンニョ少年―ブラジルをたずねて―』を出して作家デビューを飾っている。<sup>4</sup>『魔女の宅急便』第一巻を福音館書店から出したのは一九八五年なので、刊行直後にアニメ映画業界の注目を集めるほどの人気作家の地位を確立していたといえよう。かどのはその後も続編を書き続け、二〇〇九年の第六巻でシリーズを終えている。

### ③「なぜラテンアメリカなんか？」

私はときどき、若い研究者や学生から、「なぜラテンアメリカなんかを研究对象に選んだんですか？」と聞かれることがある。ラテンアメリカ史を日本の研究者が扱うのは不自然だという常識が、彼らにはインプットされている。彼らは私が育った一九六〇年代、七〇年代の日本社会を知らないのです、それもやむをえない。

私が最初にラテンアメリカに出会ったのは、母から与えられた二冊の児童文学書を通じてだった。かどのえいこの『ルイジンニョ少年』と、ホセ・G・フォイステル『小さなホセとロバの旅』（岩波書店、一九六九年）が、それである。小学一年生か二年生だった私は、前者を通じて底抜けに明るいブラジル人気質や多様性があたりまえの社会に圧倒される一方で、後者を通じてポリビアにおける先住民に対する差別と貧困、そのなかで生き抜こうとするホセのたくましさや感銘を受けたのであ

る。こうしてラテンアメリカに対する興味を植え付けられた私は、床屋に並ぶ少年漫画雑誌を読んでいて、巻頭グラビアに掲載されたマチュピチュの写真にくぎ付けになるような、変わった少年に育つ。

決定打は、中学一、二年のころにやってくる。TBSラジオで夜一時ころに放送されていた「渥美清の男性諸君」という番組を聞いていると、渥美清がエルナン・コルテスによるアステカ王国征服記を朗読している。淡々とした調子であるにもかかわらず、メキシコの自然や首都テノチティトランの威容、スペイン人の行軍風景や先住民側の抵抗の様子が目の前に迫ってくるかのような印象を与え、私を放さなかった。数か月してこの征服記が終わると、渥美は引き続きフランシスコ・ピサロによるインカ帝国征服記を朗読したのである。<sup>5</sup>それが終わるころには、将来、自分はラテンアメリカ史を研究するんだと心に決めていた。

聞いたこと、読んだことに対して問いかけるといものが、歴史学の方法の第一歩である。暗記すればいいというものではない。この事例であれば、安村は偶然、このような出会いを経てラテンアメリカに関心を抱いたという答えに満足するかわりに、出版社やラジオ局がラテンアメリカ関連の企画によって利益を上げられると考えたのはなぜかと、問わねばならない。当時の日本ではラテンアメリカがうけていたのだろうと推理するのは、間違っていないが十分ではない。ラテンアメリカがうけていた理由を問うべきなのだ。この問いに対する答えを探り出してはじめて、一九六〇年代末から七〇年代半ばにかけての日本社会における歴史Aが、安村による個人的な選択を左右するメカニズムを解明できる。



である<sup>12</sup>。その数は数百万と推計され、戦争で疲弊した日本経済は彼らの生活を支え切れず、サン・フランシスコ講和条約調印後、日本政府はラテンアメリカ各国と移民送り出しに関する交渉に乗り出す。と同時に、国内では移民募集・送り出しのための窓口機関として日本海外協会連合会の結成を促した<sup>13</sup>。その結果、ブラジルへの移民が再開され、日本とラテンアメリカを結ぶ航路が拡充されるにおよんだ。かどのによるブラジルの選択は、一九五〇年代の日本社会においてブラジル渡航のための条件が整備され、情報が広く流通していたという状況において可能となったのだ。

デビュー作の冒頭、移民船がリオデジャネイロに到着せんとする場面を、かどのの次に描いている<sup>14</sup>。

日本をたつてから、五九日めの朝でした。「リオが見えたぞー、リオデジャネイロが見えたぞー」というさげび声が、船の中をはしっていきました。甲板にとびだしたわたしの目に、灯台の光がキラリ、その前方に、ブラジルのはじが見えてきました。

「とうとう、つきましたな。これからがたいへんだ。がんばらにや。」

青森からきた鈴木さんは、五さいになる宏ちゃんをぎゅっとだきしめながら、ちょっと、こわい顔していました。

「わたし、二年やって、だめだったら、オーストラリアにいくつもり、中国人どこにいくのもへいきよ。」と、ホンコンからのつきた、黄さんは元気にはなしています。

「魔女の宅急便」以前

鈴木さんや黄さんが実在したかどうかはわからないが、移民船に二人のような人がいて、かどのがこうした言葉を耳にしたのは事実だろう。編集者をはじめとする当時の大人にとり、ほんの十数年前の日本であれば多くの移民を送り出すのはごくあたりまえの出来事であり、子ども読者に対する分かりやすさを配慮して削除を求めた必要性を感じなかったからこそ、この場面はカットされなかったと考えられる。

『ルイジンニョ少年』はかどのの個人的体験の語りという点で歴史Bである。では、その歴史Bの信憑性はどうかすれば検証できるのか。「青森からきた鈴木さん」に関していえば、ブラジル移民の話がどうやって青森まで届いたのかを確かめる必要がある。当時、全国の農村部までカバーする数少ないメディアの一つだった全国農業協同組合連合会の機関紙『家の光』は、その一九五三年八月号で「移民の知識」という特集を組んだ<sup>15</sup>。国際農友会常務理事の吉崎千秋の冒頭の言葉に続き、読者に近い立場にある編集者が質問し、外務省欧（欧）米局第二課と農林省農地局人植課の職員が解答するという形式で特集は展開する。問い合わせ先としては、海外協会中央会、日伯協会、国際農友会に加えて両省が名を連ね、移民が国家プロジェクトだという印象を強めている。その冒頭のやりとりは次のとおりである。

問 海外へ移民したいのですが、日本移民の入植できる国はどこですか。

答 ブラジルには今後五年ないし八年間に、九千家族の入国が許可されており、その隣国パラグワイには年度の制限はないが百二十

家族ほど許可されています。(後略)<sup>17)</sup>

この特集が全国の農協を通じて、各農家にまで到達したのは確実だろう。結果として「鈴木さん」は家族でのブラジル移住を決断した。ただ、「鈴木さん」は、固有名詞というよりも、同じような歴史Aの産物である多くの農民の集合名詞として機能することで、かどのによる歴史Bの信憑性を担保しているのだ。さらにいえば、かどのの歴史Bが作品として世に出ることを可能にしたのも、日本が先進国の仲間入りをし、国民の目が海外に向けられつつあった一九七〇年の時点で、一九五〇―六〇年代の移民送り出しに関する記憶が共有されていたという歴史Aだったのだ。

現在、移民はしばしば到着先で差別されたり、入国を拒否されたりしている。そうした映像はマスメディアで毎月流されているし、ネットであれば毎日だろう。事実上の移民受け入れ政策を採用した日本政府も、外国人労働者が家族を同伴することには否定的である。歴史学を志すのであれば、現在とは対照的に、当時のブラジル政府やパラグワイ政府が家族単位での移民を歓迎していたのはなぜかと問う姿勢が求められる。

#### ⑤移民を必要とするアメリカ大陸

南北アメリカ大陸に存在する諸国家は、スペイン、ポルトガル、フランス、イギリス、オランダなどの植民地に起源を有する。当然のことながら、独立前から多くの移民を受け入れてきた。米国を移民国家と呼ぶのは周知のことだが、米国だけの話ではない。<sup>18)</sup>

植民地時代の移民には、ヨーロッパの本国から自主的に移住してくる

集団と、奴隷として強制的にアフリカから連れてこられるアフリカ系の集団がいた。<sup>19)</sup> 度合いはさまざまだが、どの植民地も黒人奴隷に依存していたといえよう。とくに、プランテーションによるサトウキビ、たばこ、綿花といった商品作物の栽培に特化した植民地では、黒人奴隷に対する依存度が高かった。奴隷の労働条件は劣悪で、子どもが育つ率は低く、この経済制度が機能し続けるには奴隷貿易が不可欠だった。

この状況に衝撃を与えたのは、フランス領サン・ドマング植民地における黒人反乱、奴隷制の廃止、ハイチの建国(一八〇四年)<sup>20)</sup>と、イギリスによる黒人奴隷貿易の非合法化(一八〇七年)から奴隷制廃止(一八三三年)<sup>21)</sup>という、歴史A上の二つの流れであった。ハイチ建国は、奴隷制プランテーションに依存する植民地とその後継国家に対して奴隷解放に慎重な態度をとらせる一方で、それらはイギリスによる奴隷貿易、奴隷制廃止に向けた圧力を受けたからである。独立間もないラテンアメリカ諸国は外交面で、再征服を目指すスペイン本国に対抗すべくイギリスの承認を必要としており、そのための手段として、国内の反対を押し切り、奴隷貿易、奴隷制の廃止に向かっていく。ポルトガルから円満に独立したブラジルの場合も、最大の貿易国となったイギリスの圧力に抗しきれず、一八八八年に奴隷制廃止に追い込まれる。ここに、ラテンアメリカ諸国が黒人奴隷に代わる労働力として移民を歓迎する下地が作られたのだ。戦前にブラジルが日本人移民を受け入れていたのも、黒人奴隷に代わる労働力としてだった。ブラジルはその後も労働力の不足に悩まされ、戦後はアマゾン川流域等の開発のために「鈴木さん」たちを歓迎

するにおよんだのである。

ラテンアメリカ側の事情は、日本の高校生、大学生には世界史の一コマでしかないと思われる。しかし、「鈴木さん」の移住が示すように、日本史と世界史はそんなに簡単に切り離せない。別の例を挙げよう。一八七二年に横浜で起きたマリア・ルス号事件は、日本史の教科書では日本最初の国際裁判につながった事例として姿を現すが、一八五一年に黒人奴隷制を廃止したベルー政府と、奴隷制廃止に実効性もたせようとするイギリス政府のあいだのせめぎあいが発端なのである。奴隷制廃止後、ベルーのプランテーション所有者たちは労働力不足に直面し、米国西部の開発に寄与した中国人労働者、いわゆる苦力の導入を図る。マリア・ルス号は中国から苦力をのせてベルーに向かう途中、横浜に寄港する。すると、船内で過酷な扱いを受けていた数名の中国人が船から逃げ、保護を求めてイギリス船に逃げ込んだことで、国際問題となってしまう。イギリス側はこれらの苦力が事実上の奴隷だと主張し、日本政府にその解放を求めたのに対し、ベルー側は自由意志で乗船した乗客だと反論したのである。<sup>(22)</sup>

かくして日本近代史は、イギリス史、米国史、中国史を媒介しつつペルー史とも接続したわけだが、その接続はここで終わらない。同時期のアルゼンチンへと舞台を移そう。アルゼンチンはもともと黒人奴隷制プランテーションに依存しておらず、独立を宣言してまもなくの一八一三年には早くも奴隷制を廃止している。内戦が終息した一九世紀後半には、イギリス資本の流入にともなって港湾や倉庫、鉄道が整備され、内

陸部で生産される小麦や牛肉をイギリスに輸出することで経済的繁栄を享受する。これが労働力不足を引き起こし、アルゼンチン政府はヨーロッパからの移民導入政策をとる。その結果、経済が停滞する一方で人口が増大していた南欧、中欧、東欧諸国から大量の移民が流入することとなる。

高畑勲、宮崎駿が携わった初期のテレビアニメ・シリーズの一つが「母をたずねて三千里」であることは周知のとおりである。この作品の原作は、一九世紀後半に活躍したイタリアの作家、エドムンド・アミーチスの児童文学『クオーレ』である。イタリア統一の活動家だったアミーチスは、国家が統一されても国民意識が形成されていないことを憂い、次世代にイタリア人意識を植え付けるべく作家活動に入った経緯から、複数のエピソードから成る『クオーレ』では、イタリア人意識を醸成するための工夫を凝らしている。「母をたずねて三千里」の舞台設定もその一つである。<sup>(23)</sup>

当時、多くのイタリア人はアルゼンチンに出稼ぎしており、アミーチスが読者として想定していた少年、少女たちにとり、身近な人間のアルゼンチンへの移住は、日常的に経験する出来事だったろう。そこでアミーチスは、主人公の少年マルコの母が病弱な父を助けるべく、単身、アルゼンチンへと出稼ぎに出た、という枠組みを設定したのである。到着したアルゼンチンで、港から内陸部へと母をたずねて旅するなか、マルコはアルゼンチン人から酷い扱いを受ける一方で多くのイタリア人移民と出会い、助けられ、ついに母との再会を果たす。読者は、様々なエ

ピノードを読むなかで、マルコが母と再会できたのはイタリア人移民のおかげであり、「イタリア人に生まれてよかったな」という意識を知らず知らずのうちに植え付けられるというわけだ。

かくして、高畑と宮崎は、その選択により、戦後日本のテレビ視聴者を、アルゼンチン史、さらにはイタリア史とも接続したわけである。それにしても、高畑と宮崎はどうして「母をたずねて三千里」を原作として選んだのだろうか。私たちはふたたび、一九六〇年代、七〇年代の日本へと戻らねばならない。

#### ⑥戦後日本のなかの「世界名作劇場」

戦後日本の文化状況を考えるとき、世界化と大衆化という側面を見落としてはならない。それに加えて、「消費者としての子ども」の誕生も画期をなそう。

明治維新以来、日本が欧米からさまざまな文化、技術を吸収したことや、大正期には児童文学が確立し、『少年倶楽部』、『少女倶楽部』なども発刊されたことの重要性を否定するつもりはない。ただ、戦前の翻訳文化や児童文学の普及は、地理的、階級的にきわめて限定されたものだったといえるのではないか。それに對し、一九五〇年代に入ると、世界文学やその中の児童文学に対する関心が急速に高まると同時に、子どもをターゲットとする販売戦略が台頭してくる。一方で村岡花子訳の『赤毛のアン』日本語版が一九五二年に刊行されたのに對し、他方で一九五四年には東宝の「ゴジラ」シリーズが開始される。後者の流れは草創期のテレビ制作にも受け継がれ、子ども向けのアニメ番組や特撮番組

が次々と制作されて人気を集めるとともに、タイアップした商品が次々と開発される。ただ、番組のなかには、ハイ・カルチャーを志向する一部の親に受け入れがたいものがあつたことは、見過ごせない。

こうした状況下、親と子どもが一緒に楽しめるアニメ番組として始まったのが「世界名作劇場」である。一九六九年、「カルピスマンが劇場」として始まったこのシリーズは、第一作こそ手塚治の「どろろ」であつたが、第二作の「ムーミン」以降は一貫して世界児童文学の名作を原作としていく。このとき、戦後日本文化の世界化、大衆化、消費者としての子どもの誕生という流れが、合流したのである。一九七九年に「世界名作劇場」と名称を変更し、その第一作「赤毛のアン」は高畑と宮崎が制作を担当した。二人は、「カルピスマンが劇場」時代の最後の作品「アルプスの少女ハイジ」（一九七四年）からこのシリーズに関わり、「母をたずねて三千里」（一九七六年）は「カルピスこども劇場」時代の作品である。

こうしてみると、高畑や宮崎が偶然、『クオレ』を選んだわけではないことが見えてくる。戦後日本における文化状況、消費社会化の流れが交錯するという歴史Aこそが、世界児童文学の名作から原作を選ぶという制約条件を生み出し、それが二人の選択の幅をあらかじめ規定していたのである。アニメ「母をたずねて三千里」という歴史B（そこでは過去のイタリアやアルゼンチンでの出来事が語られており、歴史Bであるのは納得してもらえらるだろう）は、戦後日本の歴史Aのなかに可能性の条件を見出したといえよう。

⑦おわりに―「魔女の宅急便」と移民問題―

安村という歴史研究者がどうしてラテンアメリカを研究対象として選んだのかという問いから出発し、かどのとの出会いという答えに満足せず、新たな問いかけを繰り返すことで、戦後の日本社会とラテンアメリカ史との意外な接点を掘り起こすことができたのではなからうか。これは同時に、歴史学の基本的な作法がいかなるものであるかを体験してもらう過程でもあった。最後に、本講義が参加者にとって身近に感じられた最大の理由である映画「魔女の宅急便」について考えておこう。

ブラジルでの生活体験に基づく歴史Bで作家デビューを飾ったかどはいこには、どこか異国風というか、無国籍というか、土着とは縁遠い雰囲気をもった作品が少なくない。「魔女の宅急便」もその一例といえる。一方、世界児童文学のアニメ化に早くから関与してきた宮崎にも同様の傾向を見てとれよう。企画を立ち上げた人物は、二人の歩んできた歴史Aを念頭に置きながら、この二人の組み合わせなら成功間違いなしとふんだのだろう。そして実際、想定外の大ヒット映画となるのだ。

歴史学の作法に従えば、問いはここから始まる。公開当時、大ヒットしたとしても、三〇年後の高校生や大学生にもファンがいる映画は滅多にない。これはどうして可能となったのか。この身近な問いに答えるためには、公開後の日本社会および諸外国がこれまで辿ってきた歴史Aのなかから、人気の持続を下支えしてきた可能性の条件を探り当てねばならない。その道のりは長く、折れ曲がっており、ときに道は消えたように見え、絶望にさいなまれるかもしれないが、時空を超えた意外な脇道

が思いがけない歴史Aとの接続を可能にし、あなたたちの成り立ちを教えてくれる。そして、そこそが、歴史Bの実践を通じ、新たな未来を切り開くための起点となるのだ。

こうした訓練をどれだけ積んでいるかは、日本社会の抱える諸課題にどう向き合うべきかを考えるうえでも重要である。あなたたちは、安村という実例の来歴を追うなかで、日本がかつては移民送出国だったことを知った。しかも、移民たちは歴史Aのなかで、日本政府に誘導されて移住を選択させられた面も否めない。新天地を前にした「鈴木さん」が、やる気まんまんな表情ではなく、「ちよつと、こわい顔」を見せたのは、やはり政府主導で実施された戦前、戦中の移住の末路を知っていたからではないか。<sup>27)</sup>

こう問いかけるにいたったならば、戦中、志願兵としてヨーロッパで戦ったハワイの日系二世ダニエル・イノウエが戦後、米国連邦下院議員となり、一九五九年、当時の日本の首相に対して「いつか日系人が米国大使となる日がくるかもしれません」と述べたときに、「国を棄てた」移民に対する侮蔑をあらわにした首相の態度がいかに不当だったかを理解するのは容易だろう。<sup>28)</sup> 日本政府が国民に対して海外移住を促した事実を知ったのだから。<sup>29)</sup>

また、移住先に関して問いかける姿勢も大切である。単身の移民は当てにならないこともあると学習したからこそ、戦後、日本人移民受け入れを再開するにあたり、ブラジル政府は家族単位での移住という条件を付けたのではないか。こう問いかければ、移民を労働力としてのみ捉え

るのが不十分かもしれないと考えることもできよう。

歴史Aから学び、適切な問いかけを通じて歴史Bを展開することは、流されるだけでなく、新しい流れを作り出す起点となりうる。この意味で、歴史Bの一部としての歴史学は役に立つのだ。

### 3. 聞き手の反応、あるいはいかに彼女、彼らの主体性を引き出すか

#### ① 高校生の反応

高大連携講座は五〇分×二コマで実施したが、実際には上記の原稿を読み上げたわけではない。生徒の反応を見ながら、半分くらいに圧縮して話を進めたのである。教科書の重要事項を覚えさせるのはあまりに異質な話の進め方―答えが出たと思つた途端、新たに問いを立て、さらなる答えを探るのだから―にとまどつたせいか、彼女、彼らからは質問等は出なかった。生徒の主体的な学びという理想からはかけ離れた結果だと自らの力不足を嘆いていたところ、参加した生徒の高校提出用レポート二六名分が送られてきた<sup>30</sup>。そこからは彼女、彼らの主体性を窺うことができる。

講義内容の要約という欄に関していえば、当日配布したレジюмеはA4三枚と地図一枚だけなので、聞き手が重要だと思つたことを書き取る必要があった。さらに付け加えると、私は板書もしなかった。その結果、どれだけ主体的に聞こうとしたかにより、内容の精粗が変わってくる。導入のところで、歴史学の有用性を分かち合つてもらうため、現代日本の移民問題に歴史学がどう切り込めるかを示すと私が言ったのがポイン

トだとかんだ生徒は、欄を二つに分け、左側に過去の日本からの移民の話をまとめ、右側に現代日本の話をまとめるというノート作りをしている。それに対し、そのポイントをつかめないと、レジюмеの内容をかいつまんで書き込むだけに終わったり、ノートに書き取ったことをそのまま欄に詰め込んだりしている。主体性はどうかやら聞き方にも関わってくるらしい。

私が伝えたかったポイントに即して見ていこう。歴史学で大切なのが一つの答えに満足せず、次々と問いかけていく姿勢だとわかったと一六名が言及し、くわえて歴史が暗記物だという認識が変わつたと書いている生徒も五名いるので、この点はかなり聞き手に伝わつたとみていいだろう。他方で、板書がないのでよく考えることができたと言った生徒が、主要だと思つたことを記述するのは大変だったとも書いており、ある程度の板書で生徒の主体的な聞き取りを楽にする必要があるのかもしれない。

自分にとっては疎遠な、教科書に出てくるだけの出来事からなる歴史Aが、実は自分のいまを作っているという感覚、あるいは自分の身近な空間が世界の他地域、他の時代と接続しているという感覚を持てたと書いている生徒は一〇名いた。その延長線上に、だから未来を考えるうえで歴史学は役に立つのだというメッセージの意味がわかったという生徒や、歴史学の有用性に言及した生徒も八名おり、歴史を主体的かつ日本史、世界史の垣根を越えて学び、これからの人生に活用する力を育てるという歴史総合の目標に、少しは近づけたということだろうか。

レジュメに書き込まれていないが、私が言及したことがらをどれだけ拾っているかを見てみよう。それは、現代における移民問題への導入として私が取り上げたトランプの反移民政策をはじめとして、安村が主体的にラテンアメリカ史を選んだとしてもきつかけはラテンアメリカ・ブームによって与えられていたことや、日本政府が主導して移民を送り出していたこと、移住事業団が後に国際協力機構の母体となったこと、戦前・戦中の日本では子どもをさほど子ども扱っていなかったこと、引用したかどのの一節に関連してオーストラリアは厳しい入国審査を実施していたこと（かどのの歴史Bは、自らの体験を香港やオーストラリアの現代史とも接続していたのだ）、ペルーで日系人が大統領になったことなど、多岐におよぶ。これらはいずれも一名のレポートにしか出てきていないので、聞き手として現代の高校生がどんなことに興味を持つのかを知ることができる。この多様性は、彼女、彼らが主体的に聞いた結果と見なせるだろう。

百名を超える参加者中の二六名であるから、ここでの分析を一般化するのには慎まねばならない。ただ、人数などの問題から対話型授業を実施できない場合でも、問いかけを繰り返し、身近な問題から複数の地域や時代へと話を展開していくと、聞き手は板書を写すだけではない主体的な姿勢を身に付けることがある、とはいえるだろう。もちろん、その前提として、小学校以来、社会科教員が教科書、プリント、板書などを通じて基礎事実を生徒たちに教えてきてくれたことを見落としてはならない。私の高大連携講座はあくまで、そうした教員の努力のうえに可能と

「魔女の宅急便」以前

なったのである。

## ②大学生の反応

受講した高校生の六割が、歴史学の基本は事実を繰り返し問いかけることだと理解してくれた。であれば、より長い時間をかけて授業を組み立てられる大学生相手であれば、主体的な学びの場として活用する学生の比率は上がるだろうと期待したくなるが、私の話者としての能力不足もあり、うまくいかないことも多い。他方で、「安村さんがラテンアメリカと出会ったのと同じように、いまの若者はK-popにはまるのだろう」といった感想を書く学生もいる。歴史的社会的拘束性というポイントをつかんでくれたのだ。

一二〇名前後の学生を相手とする講義で対話を通じて学生の主体性を引き出すのは難しいので、私は史料を提示し、小テストでそれについて問いを立てさせることにしている。次回の授業で解答例をいくつか紹介することで、史料に問いかけ、主体的に読解することの大切さを伝えようとしたのである。その成否を具体的に振り返っていきこう。

すでに引用したかどの『ルイジンニョ少年』の一節を提示し、何か所か下線を付す。最初の下線部に問い、問いの立て方の実例をあげた上で、残りの下線部について問いを立てさせる。鈴木さんが宏ちゃんをだきしめながら、こわい顔をして話をした場面については、「だきしめることと、こわい顔をすることのあいだにはどんな関係があるのか」とか、「（こわい）にもいろいろな種類があるが、そのうちどんな（こわい）だったのか」「新天地を前にして希望を抱いているはずなのに、何

が鈴木さんにこわい顔をさせたのか」といった問いを立てている。問いを立てると、おのずと「家族を守らないといけないという気持ちと守っていないのかという不安のあいだで揺られてこわい顔をしたのだろうか」という仮説を提示するところまで踏み込む学生も出てくる。教師として、学生の主体性を引き出せたと思える瞬間である。

「わたし、二年やって、だめだったら、オーストラリアにいくつもり」という黄さんの発言については、「二年間、何をやるつもりなのか」以下、「成否を判断する基準は何なのか」、「どうしてブラジルの次がオーストラリアなのか」といった問いが次々と出てくる。一つの史料に問いかけることで、やすやすと彼女、彼らは日本史の壁を突破してくれる。

最後は、黄さんが「元氣そうにはなしています」という個所に関し、かどのを主語にして問いを立てさせてみる。すると、「黄さんは日本語で話していたのか」、「黄さんはどうやって日本語を学んだのか」といった、少しずれた問いに加え、「かどのは中国語が分かるのか」、「かどのは何を基準に元氣にと形容したのか」、「かどのはどうしてこわい顔の鈴木さんと元氣な黄さんを並べたのか」といった適切な問いを立てる学生も出てくる。史料の登場人物ではなく、史料作成者についても問いかけるのだ。少しずれた問いにしても、答えが日本語だとすれば、戦時中の日本による香港占領を想起させるものであり、一つの史料への問いかけが、学生を史料作成以前へと遡らせるかもしれないのである。また、かどのがここだけ現在形を用いていることに疑問を抱く学生もおり、史料作成におけるレトリックへの関心の萌芽を見て取れる。

これに対し、同じ史料の読解であっても、問いを立てさせないと、なかなかうまくいかない。すでに引用した『家の光』の記事に関し、ブラジル政府が日本からの移民を歓迎していた理由を推理させてみる。その際、前回の講義で、ネットで検索しても答えのみつかからないことが多いことを長々と説明したので、ネットで調べてもかまわないと付け加えたのが失敗だった。史料に問いかけ、読み込むかわりに、ネットで出てきた情報に頼ってしまうのである。「ヴァルガス政権は工業化を推進するための労働力として移民を歓迎していた」といった感じとなる。

もちろん、それなりの数の学生は、史料の文面と書誌情報（雑誌の発行元や、特集で答えていたのは外務省、農林省の役人だったことなど）から推理し、「この雑誌の読者は農民で、農林省の役人が答えているから、ブラジル政府は日本からの移民を農業開発のために歓迎したのではないか」とか、逆に「全国農協連合会と所轄官庁である農林省の組み合わせはこの特集がやらせである可能性を示しており、ブラジル政府はそれほど歓迎していなかったのではないか」などと答えてくれる。この延長線上に、ネットで検索しても答えようがない、「ブラジル政府が家族での移住を許可した理由は何かを推理しなさい」という質問を出すと、自分で推理したことが明らかかな答案の比率は上がるのである。

学生が史料の読解に主体的に取り組むかどうかは、教員による適切な誘導が肝心だということを、この結果は教えてくれる。

#### 四、おわりに

歴史総合の理念に従い、大学における講義を組み立てるにはどうすべきか、こういった要因が学生の主体性を引き出し、あるいは阻害するのかを、自らの経験に基づいて検討してきた。主体性を引き出すうえで、テーマの選択が重要なことはいうまでもない。読解対象がかどのえいこの作品であれば明らかに聞き手ののりはいい（「魔女の宅急便」の威光はかどののデビュー作にも特別のオーラを与えるようだ）のに対し、通常の史料だと士気が下がってしまうのだから。しかし、個人人の経験と日本現代史からラテンアメリカ史へと学生を誘ううえで、「魔女の宅急便」に匹敵する素材はなかなか転がっていないものである。

最後に指摘しておきたいのは、学生が主体的に史料読解に取り組み上で、高校までの従来の授業から何をどう学んできたのかが、授業態度を左右するという事実である。たとえば、ある自治体を立てた、神社の歴史に関する案内板を史料として取り上げる。内容は、日本政府が一九〇七年から神社整理を断行し、それが当該神社の村社への合祀につながったというものである。この内容に関し、問いを立てるといわれると、「日露戦争後の財政難のなか、どうして神社整理などに力を入れたのか」とか、「どうやって予算、人材を手当てしたのか」、「神社整理を始めるきっかけとして、天皇の立場が揺らぐような事件があったのか」、「地方改良運動の一環だったのか」など、高校までに学んだ出来事と自分なりに関連させて彼女、彼らは問いかける。

高校までの歴史学習が受験勉強のためだけだったとしたら、こういう

「魔女の宅急便」以前

問いは出てこなかっただろう。こうした生徒／学生を、厳しい状況のなかでも育ててくださった高校までの社会科教員、および教科書執筆に携わってきた方々の努力に謝意を表して、筆をおくことにする。

#### 注

- (1) 日本学術会議史学委員会高校歴史教育に関する分科会による提言。詳細は以下のサイトを参照。 [sci.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-1228-2.pdf](http://sci.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-1228-2.pdf)
- (2) 若尾政希『百姓一揆』岩波新書、二〇一八年、二二二―二三四頁。
- (3) 西洋史概説、史学概論は二年度とも二二〇名前後の学生が履修し、毎回、小テストを実施した。その結果を次回の講義冒頭で紹介するとともに、そこで出された疑問等に答えるべく授業内容の変更を余儀なくされ、したがって私のラテンアメリカとの出会いの取り上げ方も変化した。青山学院大学高大連携講座では、両講義で断片的に扱ってきた細部をつなぎあわせ、一貫した講義に組み替えたのである。参加したのは、青山学院高等部、青山学院横浜英和高校、横須賀学院高校の生徒たちである。
- (4) 角野栄子ではなく「かどのえいこ」を用いるのは、デビュー作での著者名を尊重しての選択である。彼女の最初の読者の一人だった私には、いまでもかどのえいこのなだ。
- (5) 二人の征服者の事績については、安村直己『コルテスとピサロー遍歴と定住のはざままで生きた征服者』山川出版社、二〇一六年を参照。
- (6) エルネスト・チェ・ゲバラ（仲晃、丹羽光男訳）『ゲバラ日記』みすず書房、一九六八年。
- (7) 発見の経緯とその意義については、一九六一年三月刊行の『学士會会報』20675に泉本人が寄せた報告が掲載されている。「ロトシ遺跡の発掘―アマ

- ゾン河源流に埋れていた新大陸最古の文明」。これは、学士會サイト上にあるアーカイブで読むことができる (Gakushikai.or.jp/magazine/archives)。
- (8) 一九六〇年四月以降、調査を後援した読売新聞社は、同年中に七回、紙上でこの調査団を取り上げている。ヨミダス歴史館または『読売新聞』一九六〇年縮刷版を参照。
- (9) ヨミダス歴史館または『読売新聞』一九六〇年縮刷版を参照。
- (10) 泉の広報戦術は、エッセイストとしての文筆活動にまでおよんだ。下川正晴によれば、司馬遼太郎も泉の熱心な読者だったという。下川は、『街道をゆく』二八巻の「泉靖一のこと」と題された節を、その証拠として挙げている。下川正晴『忘却の引揚げ史―泉靖一と二日市保養所』弦書房、二〇一七年、一一一―一二二頁。下川は指摘していないが、司馬は三八巻にも「泉靖一」という節を設け、泉のオホーツク文化研究への貢献を強調している。司馬遼太郎『街道をゆく』朝日文芸文庫版、二八巻、二七〇―二八一頁および三八巻、二四一―二五二頁。
- (11) 明治時代から一九六〇年代までの海外移住については、日本移住学会編『日本人と海外移住―移民の歴史・現状・展望』明石書店、二〇一八年を参照。ハワイ、米国、カナダ、ブラジル、中南米、満州、東南アジアの移住先ごとに章を立てており、参照しやすい。
- (12) 大陸からの帰還がいかに厳しいものだったかは、下川、前掲書や、飯田市歴史研究所が刊行してきた聞き取りの記録を参照。
- (13) 連合会は他の団体との統合を経て、海外移住事業団、国際協力事業団(現国際協力機構)へと発展改組されていく。国際協力事業団の設立は一九七四年のことであり、ここに日本は、支え切れない国民を海外に送り出す側から、途上国の開発を支援する側への転換を完了したといえよう。
- (14) 連合会はその名のとおり、全国各地に支部を有していた。支部の中には、
- 連合会設立以前に結成された団体もあるかもしれない。いずれにせよ、こうしたネットワークが情報の拡散に寄与したのである。各地の窓口としての支部の役割については、『家の光』一九五三年八月号、一九七―一九八頁を参照。
- (15) かどのえいこ『ルイジアンニョ少年―ブラジルをたずねて』ポプラ社、一九七〇年、一二―一三頁。
- (16) この特集の存在については、広島市にある生活資料館・ハワイ移民資料館館長の川崎壽氏からご教示をえた。記して謝意を表したい。
- (17) 『家の光』前掲号、一九二―一九八頁。原文では、一から十までの漢数字を除き、すべての漢字にひらがなでルビが付されている。戦前期から発行されていた同誌の編集部は経験上、こうした配慮をとっていたと思われる。
- (18) 米国については、貴堂嘉之『移民国家アメリカの歴史』岩波新書、二〇一八年を参照。
- (19) 少数ながらアジアからも植民地期のメキシコなどには移民が流入していた。それも二種類に分けられ、奴隷扱いされたアジア人が解放のために闘った様子が明らかにされつつある。Seijas, Tatiana, Asian slaves in colonial Mexico. From Chinos to Indians, New York: Cambridge University Press, 2014 を参照。
- (20) ハイチ革命の世界史的意義については、浜忠雄『カリブからの問い―ハイチ革命と近代世界―』岩波書店、二〇〇三年を参照。
- (21) 奴隷制廃止運動の展開については、布留川正博『奴隷船の世界史』岩波新書、二〇一九年、三・四章を参照。
- (22) 奴隷制廃止後のアメリカ大陸への中国人労働者の移動については、園田節子『南北アメリカ大陸華民と近代中国―一九世紀トランスナショナル・マイグレーション』東京大学出版会、二〇〇九年を参照。なお、この事件をきっかけに、ラテンアメリカ諸国中、ペルーは最初に日本と外交関係を結

ぶこととなった。

- (23) 『クオーレ』とイタリア・ナシヨナリズムについては、藤澤房俊『クオーレの時代』―近代イタリアの子供と国家― ちくま学芸文庫、一九九八年（一九九三年）を参照。

- (24) イタリアアールゼンチン間の人の移動については、北村暁夫『ナポリのマラドナーイタリアにおける「南」とは何か』山川出版社、二〇〇五年を参照。

- (25) この段落の記述について、日本現代史の専門家でない私は、戦前・戦中の子どもに関する大門正克『増補版 民衆の教育経験―戦前・戦中の子どもたち』岩波現代文庫、二〇一九年に相当するような参考文献を探し出せておらず、自らの経験と断片的な読書歴に基づいて書かざるをえなかった。おそらく、社会学のメディア論や文学史研究などの分野では研究が進んでいるのであろう。読者の批判をまちたい。なお、個人的な経験としては、自宅に河出書房世界文学全集があったことや、学習研究者の『科学』と『学習』の学校での販売が終わったことに憤っていたら、翌月から正門前の店舗で販売されてほっとしたこと、映画会社による長期休暇中の三本立て「まんが祭り」がクラス中の話題となる一方で「ドリトル先生」（井伏鱒二）による翻訳の歴史そのものが戦前、戦中と戦後のあいだの断絶を示しているといえないか）シリーズを愛読する級友が複数存在していたこと、どこも向けのテレビ番組が特定商品の爆発的人気につながったことなどが、思い浮かぶ。これらはいくまで一九七〇年代前半の東京都下の男子公立小学生が経験した事柄であり、世代、地域、ジェンダーによる差異もあったにちがいない。今後の研究の進展が期待される。

- (26) 学生に対しては安易にウイキペディアを使わないように指導しておきながら、ここで私は事実経過についてウイキペディア日本語版の「世界名作劇

「魔女の宅急便」以前

場」に依拠している。高畑、宮崎の絶大な人気と、彼らのファンの熱意を考慮すると、この項目になんらかの誤りがあれば訂正されると想定できるからである。もちろん、誤りがあったとしたら、クロスチェックを怠った私の責任である。

- (27) 拓務省創設後のアジア各地、南洋等への移住を促進する国策の延長線上に、サン・フランシスコ講和条約発効後の日本政府による移民送り出しに関する南米諸国との交渉開始を理解する必要がある。

- (28) この出来事については、貴堂、前掲書、一九九頁を参照。なお、当時の首相だった岸信介は、一九三六年から三九年まで満州国で経済政策を担当していた。その時期に満州国は日本からの移民を大量に受け入れていたのである。日本移民学会編、前掲書、七章を参照。

- (29) 移住を選択した方々がかならずしも自らを「棄民」と見なしていないことは、注(15)で言及した川崎壽氏から二〇一七年一月にうかがった。新天地で自らの人生を切り拓こうと考え、移住先で成功された場合も多い以上、移民を一括して棄民扱いするのは間違っている。ただ、日本政府による棄民と見なすべき事例があったことを忘れてはならない。これについては、遠藤十亜希『南米「棄民」政策の実像』岩波書店、二〇一六年を参照。
- (30) 当日、生徒を引率された横須賀学院高校の染谷和正先生、および同校連携担当の森尚美先生には、レポートの写しを送っていたことについて謝意を表したい。